

『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』論

三重野 由加

はじめに（研究史・省略）

本論

第一章 「私」と「僕」との位置関係（結論のみ略記）

本作品にはふたつの世界が存在する。「世界の終り」と「ハードボイルド・ワンダーランド」である。前者は主人公の無意識世界（ここでは「僕」という一人称で語られる）。後者は主人公の意識世界（ここでは「私」という一人称で語られる）である。「私」と「僕」は同一人物であることは言うまでもない。「僕」は無意識世界に参入するにあたって「影」を切り取られるが、この「影」は主人公の自我を指している。「『自我』は単に意識の主体である^{（註1）}」のであり、無意識の世界に侵入できないのだ。

第二章 ふたつの世界における〈水〉

前章で考案の前提としてふたつの世界の関係を定義した。そのふたつの世界において遍在する要素がいくつもあるが、その中でとくに遍在的傾向が強いと考えられる〈水〉を中

心にふたつの世界のつながりや意味の考察をしてみたい。

第一節 川・滝・たまり

「ハードボイルド・ワンダーランド」は、「私」が博士の研究室を訪れるために乗ったエレベーターの中から始まる。そして、秘密の通路ではじめて「私」は川の音を聞く。川のお陰で、孫娘の「無音のしゃべり方はいささかのリアリティーが加わったように」感じられる。博士の研究室までは、川をまっすぐ上流に歩けば良い。川はやがてその流れと音によって、「私」を「世界の終り」へと導く。

さて、川を遡ると上流には滝があり、この滝を潜らなければ博士の研究室に入ることができない。「滝の中でも一番水量の少ない箇所」でも「体が地面に叩きつけられるくらい勢い」の滝である。「私」は、この仕掛けを博士が秘密を保持するためであろうと推測するが、本当にそうだろうか。この滝の源が、どこにあるかを考えたとき、それが「世界の終り」にあると考えることができるのだ。

つまり、ふたつの世界に流れる川は主人公の無意識世界に

源をもっている。この川の流れは、主人公の心的エネルギーのシンボリックな表現なのだ。このような仮説の下に川についての考察をすすめていきたい。

「僕」は、図書館で仕事を手伝ってくれる女の子（以後、「彼女」とする）の心を見つけたはず手がかりとなった手風琴を手に入れる。その手風琴のあった発電所に向かう時、門番が「僕」に川沿いの道を上流に向けて歩けと教える。

「ハードボイルド・ワンダーランド」の「私」に対するのと同じく、川は、「僕」に必要な情報を与える。川は主人公の心の動きに合わせて、欲するところへと導いていると言えるだろう。

次に、「影」が「僕」と一緒にもとの世界に戻るために飛び込もうとした。つまりは、「世界の終り」と「ハードボイルド・ワンダーランド」をつなぐ唯一の接点であると考えられる（補注参照）。この川が流れる街を構成する要素は、「私」の無意識であり、（博士の言うように、人工的な組み替えが行なわれていても、もともと「私」自身のものである）その無意識は現実世界での「私」の意識によって構成されたものである。つまり、ふたつの世界は、主人公の心的エネルギーの流れによって結びついているのである。その心的エネルギーが、川というかたちをとって流れていると考えたい。そう考えられる理由として、「世界の終り」における川と森だけが、生命感を持っていることが挙げられるだろう。森は「心」を持つ人々が住むところなので当然生命感があり、川が流れている。このうち街を流れる川の

持つ生命感について考察をすすめたい。

川の持つ生命感とは、「世界の終り」が、「彼女」のいうように閉じてしまった世界ならば存在しないはずである。自己完結的な無意識世界であるならば、現実世とは無縁に存在するはずだ。そこではリアルな「生」など存在し得ない。しかし川は、〈水〉の持つ有機体としての存在を確かに表出している。

「影」が「僕」に次のように語っている。

「この川には悪意というものが感じられない。そしてこの水には生命感があふれている。この水を辿っていったその流れに身をまかせれば俺たちはきつと街をでて、本当の命が本来の姿で生きている場所に戻ることができる」（38）

ここから街の機能と相反した有機的な〈水〉は、生命力と生活機能を持つ現実世界から流れ込んでいることが分かる。街を東西に流れたまに吸い込まれた〈水〉は、無意識から意識への通路が非常に狭いため渦を巻くことになる。そして激しい勢いで意識へと落下し滝となる。

「私」の意識世界と無意識世界をつなぐ心的エネルギーの流れが、〈水〉によって表わされ、そのエネルギーの流れが、ふたつの世界の均衡を保つもっとも重要な枠組をなしているのである。その流れが人工的エネルギーによって断ち切られることによって（無意識世界と意識世界をつなぐ回路が切断されることによって）、ふたつの世界の中で自己がバランスを保てなくなるのである。

第二節 渦・井戸・海

街からの唯一の脱出口であると考えられるたまりの下は、激しい勢いで渦を巻いている。「彼女」の説明によれば、昔は罪人を投げ込んだという。「彼女」による渦の説明を抜き出してみたい。

彼女は手のひらほどの大きさの木ぎれを見つけて、たまりのまん中あたりをめぐって放り投げた。(中略)まるで何かに足をひきずりこまれるように水中に姿を消し、二度とは浮かびあがってこなかった。

「さっきも言ったように、底の方では強い渦が巻いているのよ。これでよくわかったでしょ？」(12)

ここで、このたまりの〈水〉が、街を流れる川の〈水〉によって満たされていることを思い出さなければならぬ。川は「私」の心的エネルギーである。そしてエネルギーが集結し、意識世界へと流れ出る場所が、たまりなのである。

「あなたが意識の底に封じこめておるものの強さや性格やその成因をもう少し具体的に推測できる(略)」

(25)

これは、博士が実験の目的を「私」に語ったものである。「もの」とは、「私」が無意識のうちに封じこめた心的エネルギーを指し、たまりの底の渦であると考えられる。渦において心的エネルギーが本来の激しい姿で存在しているのである。よって、たまりに飛び込むことで、その渦のもつ

心的エネルギーを獲得し、自己を回復することができるものと考えられる。さらに、たまりに罪人を投げ込むのは、〈水〉のもつ力を利用した罪人の浄化という目的があるのではないかと考えられる。「ハードボイルド・ワンダーランド」における海底の〈水〉が悪意を感じさせないことから、このことは推測される。

一方川の水脈とは異なるものの〈水〉のイメージと通じるものに、井戸と森のせせらぎとがある。まず、井戸について考察したい。

井戸は人工的に地下水脈まで掘り下げられた穴を通して、水が湧きだしているものである。泉のように最初から自然に湧きだしたのではなく、あくまでもそこに人工的な力が関与しているものとして捉えられる。しかし掘られた後は、泉と同じく〈水〉の持つ生命力によって湧き続ける。

また井戸の〈水〉は、それを必要とする者の手で、やはり人口的に汲み上げられなければならない。井戸の〈水〉の特性が、川の音が情報であるという意味において、ことばと共通部分を持つこと、つまり人工的に作られたものであり、かつ自然に湧き出るものだが、必要とする者の手で汲み上げられなければ使えないことなどから、この「世界の終り」の井戸がことばの井戸であると考えられる。この井戸は、ことばが埋められた井戸なのである。

僕の意識の中からはあらゆる言葉が失われていた。彼の言葉さえ、正確に理解することができないのだ。

(14)

正確な言葉が失われてしまっているのだ。(6)

これらの「僕」の表白から、「僕」がことばを失っていることがわかり、街を構成する要素が「僕」自身である以上、街もことばを失っていると考えられる。

また、井戸も「僕自身」である以上、埋めたのも「僕」(あるいは「私」)である。そこで「私」の現実世界への回想が、「僕」によって繰り返されていることを確認してみい。

もっと若い頃、私はそんな哀しみ(引用者注：涙を流すことのできない哀しみ)をなんとか言葉に変えてみようを試みたことがあった。しかしどれだけ言葉を尽くしてみても、それを誰かに伝えることはできないし、自分自身にさえ伝えることはできないのだと思つて、私はそうすることをあきらめた。そのようにして私は私の言葉を閉ざし、私の心を閉ざしていった。

(39)

この表白において、「私」は自らのことばを閉ざしたことを語る。そして、自ら閉ざしたことばと心を求めて、「僕」は、無力感を覚えるのである。

「僕」は、井戸に背をもたせかけて、壁のことを考えながら、「彼女」を思いながら、純粹な喪失感と、とりとめない欠落感を深めていく。「僕」が自分の思いを完全に表現できず、また、「彼女」が心を持たないために、「僕」との相互理解が得られないためであろう。なぜなら壁は「僕」自身を囲むものであり、壁の全貌を把握しようとす

ることは、自分自身の全貌を見定めようとする自己探求への試みであり、「その正確な把握」が「困難」なものであることが、「僕」に自分自身を把握できないという「無力感」を覚えさせるのである。

ところで、この井戸は、土によって埋められている。土によって埋められることで、井戸の(水)は汲み上げられることはない。しかし、東の門のようにコンクリートのよなもので埋められているのではなく、それが土であるために、水源が枯れてさえないければ、(水)の浸透力をもって土に侵入し、わずかではあるが地上に触れているのではないかと考えられる。

「僕」が失ったもの、失いつつあるものの中で、特に欲するもののひとつに、ことばが挙げられるだろう。「僕」は、井戸からしみ出ることばの存在を、明確にそれと確認できなくても、何らかの気配を敏感に感じ取っているはずである。それが「僕」に安心感を与えたものと考えられる。そして「僕」はほんのわずかではあるが、ことばを獲得する。

古井戸に背をもたせかかっていると、僕は門番の言ったことばを信じることができるような気がした。(14)

「僕」が、「ことばを信じることができる」と感じるのは、そこにことばが存在していることを感じているからである。「僕」が、ことばに触れたと考えられる理由に、この後で「僕」が熱を出して臥せったことがあげられる。つまり、「僕」がことばを獲得することを恐れて、壁による締め

付け（無意識世界が自己完結性を強固なものとするための井戸の水とことばと「僕」の接触を妨げようとしている）が行なわれたのではないかということである。

先に引用したように、「私」は言葉と心を閉ざしていったという表白ののち、現実世界の最期の場所として海を選ぶ。先述のたまりは心的エネルギーの力による浄化作用を有していたが、海は元来浄化作用を持ち、「私」にとって絶対的な存在として捉えられている。

「海から打ちあげられたものはどんなものでも不思議に浄化されているんだ。（中略）海というのは殊なものなんだ」（37）

「私」は、台風の海にのまれて浄化される「浜辺のがらくた」のように、「私」自身も波にさらわれて浄化されて別の浜に打ち上げられることを望んでいたのかも知れないと考えられる。そして、実際に「私」は海によって浄化され、やがて「悪意のない」優しい「水」とともに、「世界の終り」へと流れつくのだろう。

すべての「水」を集め新生させる海を起点とする有機体の永遠の循環が、思念の力によって、「世界の終り」の森へと転移し、同時に浄化された「私」の魂を運び去るのではないだろうか（補注参照）。現実世界において「私」が意識をなくす場所に海を選んだように、「僕」は、心を回復し、自己実現の場所として森を選ぶのである。

「ハードボイルド・ワンダーランド」には、「雨が多く語られる。

これらに共通するのは、ボブ・ディランの唄『激しい雨』以外、すべて、細かな雨であるということである。細かな雨は、雨の持つ「気体と液体との中間の遍在的な物質である」*ことを一層強く認識させるものであると考えられる。そのことは、「公平に降りつづける」ものであり、万人に平等に与えられているという意味で時間の流れを示し、誰にも止めることも免れることもできないものとして時間の呪縛を示すものと考えられる。

第三章

本論の第二章までに、ふたつの世界を主人公意識と無意識ととらえ、そのふたつの世界を循環する主人公の心的エネルギーとしての「水」や、ことばを埋めた井戸などについて考察してきた。第三章では、「水」のほかの共通する要素を取り上げて、主人公がことばを獲得するまでを考察する。

第一節 風・唄・光

「僕」が「彼女」とともに、川の導きによって、手風琴を手に入れたことは先に述べたが、その手風琴から「僕」が「彼女」の心を見つけるまでの過程を追ってみる。

まず、「僕」は「彼女」の母親についての記憶から、唄とということばを思い出すことができない。「彼女」の母の記憶は、「太陽・散歩・水遊び」から唄へと導かれて

いく。そこには太陽の光、散歩における光と風の感覚、そして水遊びには〈水〉そのものと水のはねる音があると考えてよさそうである。

「僕」は、風力発電所で手風琴を手を入れる。心を見つめる手がかりを見つけた場所も物も、どちらも風に関係がある。風は、街の静けさと対立するものである。風は、静かな街を静かに流れる川の上にも吹き、自らが持つ創造的衝動によって、閉ざされた心とことばを揺るがせる。

「じつと風音を聴いていると、少しずつつそちらの方に体がひっぱられていかれそうな気がした」(28)と「僕」が感じることからも、風も水と同じようにエネルギーを持ち、「僕」に対して働きかけていることがわかる。

黙りこんでいると風音はまるで透明な水のように部屋にもぐりこんできて、その沈黙を埋めた。(28)

という描写からは、風と水とが、それらの持つ音とエネルギーという点において、ほぼ同義に用いられていると推測される。「僕」は、空気の収縮・拡張によって、つまり手風琴が風によって音をだすことで唄を思い出す。そのとき「僕の筋肉と心をほぐし、僕の目にあたたかいなつかしい光」が与えられる。「僕」の心がほぐれるのと同時に頭骨の古い夢が「星のように白く、あたたかい光」(36)を放つのである。(光の白さは万物の総合を意味し、宇宙エネルギー、創造力を表す。*)

棚の上に並んだ無数の頭骨の中に眠っていた古い光が今覚醒しているのだ。頭骨はまるで光を細かく割っ

てちりばめた朝の海のように、そこに音もなく輝いていた。しかし僕の目は彼らの光を前にしても、もう何の眩しさも感じることはなかった。光は僕にやすらぎを与え、僕の心の古い思い出がもたらすあたたかみで充たしてくれた。僕は僕の目が既に癒されていることを感じる事ができた。もう何ものも僕の目を痛めつけることはできないのだ。(36)

書庫の闇の中で頭骨が光ることが「朝の海のように」と形容されることで、太陽光と同じ意味を持つと推測されるだろう。また古い夢が、ここでは古い光と(エネルギー)となっていることで、古い夢がたんなる過去の記憶というのではないことがわかる。「僕」にやすらぎ(自己存在の確認に基づく安心感)を与えるという点において光もまた、〈水〉や〈風〉とともに、「僕」の心的エネルギーであるといえるだろう。そして〈水〉や〈風〉との唯一であり、最大である違いは、音を持たないことである。つまり〈光〉は視覚にうったえかけるものであり、目に映るものであるということである。目は、「死ぬと閉じられることから生命を、目には空間が映ることから世界を、そして、肉体の他の部分によってけがされることのないことから真実の愛の始まりを表す*」という意味を持つことから、「何ものも僕目を痛めつけることはできない」ということばの中に、「僕」が「僕自身の世界」を知り、「彼女」との愛を獲得し、新生をとげるといふ意味が含まれているものと解釈できる。また、先に、〈光〉は音を持たないと述べたが、「四

つの音はまるでやわらかな太陽の光のように空からゆっくりと僕の心の中に舞い下りてきた」(36) ということから、心の中においては音を有するものと考えられる。

このようにして〈水〉と〈風〉と〈光〉から音とことばが、さらにそれらの持つエネルギーから生命へとつながっていくのである。

第二節 森

心やことば、そして愛などの「私」が現実世界で諦めて埋めてしまったすべてを、無意識の世界における「僕」は奪回する。そして「僕」が新生の場所として選んだのは森であった。その森についての描写を抜き出してみる。

それでもひとたび壁を離れて森の奥に足を踏み入れると、そこには不思議なほどひっそりした平和な世界が広がっていた。人の手は入っていない深い自然のもたらす大地の鮮やかな息づかいがあたりに充ち、それは僕の心を静かに解きほぐしてくれた。それは僕の目には老大佐が忠告、警告してくれたような危険な場所とは映らなかった。そこには樹木と草と小さな生物がもたらす限らない生命の循環があり、一個の石にもひとくれの土にも動かしがたい摂理のようなものが感じられた。(14)

これからわかるように、現実世界におけるごく自然な森の様子が描写されているにすぎない。そして森で生活する人々も「石炭や薪やきのこをとって街に供給」という

ごく当たり前の姿で描かれる。街の人々のように「純粋な労働」、つまり非生産的な労働ではなく、生活のために必要な労働をしているのである。そこには自然の摂理になつた自然な人間の姿が描かれていると考えられる。

「僕」が自己回復の結果、森での生活を選び取ったということは、そこに「深い自然のもたらす大地の鮮やかな息づかい」を感じ、「限らない生命の循環」があることを知り、生命の循環の中で「喜び・至福・愛情」とその対極の「絶望・幻滅・哀しみ」を得ることができると感じたからである。

「世界の終り」に入ってから「僕」はけっして、博士の言った「私自身」ではなかったし、「私自身」どころか何のものでもなかったのである。やすらかな生活の中で、さらに完全なやすらかさを得るために、自分の思い出のつまつた頭骨の夢を開放し、そうすることで自分自身を擦りへらし、「影」のいう「心のない」「ただの幻」になろうとしていたのである。

森の描写の中にも「木々のあいだを縫うようにして流れるせせらぎ」という〈水〉がある。森の中には、者のための〈水〉の循環が存在しているのである。それは、街を流れる川のように不自然にまっすぐ東西に流れる抑圧された〈水〉ではなく、自然に思うままに流れる〈水〉である。

この〈水〉は海によって新生した〈水〉であるだろうことは先の章で述べた。「私」の意識が「水」の浄化作用で浄められ、「僕」は光に浄められて森へ向かおうとする。そし

て、もはや意識世界をつかさどる「影」には、本来の人生の意味はないということに気づき、「影」を浄化させるべく、それをたまりに飛び込ませるのだと考えられる。そして、意識と無意識とを総合するためのことばを獲得し、森に入っていくのである。

第三節 ことば

「私」が闇の中で、目を開閉することについて、開けても閉じて、同じ闇でしかないことを次のように語っている。

人間のあるひとつの行為と、それとは逆の立場にある行為とのあいだには、本来ある種の有効的な差異が存在するのであり、その差異がなくなってしまうと、その行為Aと行為Bを隔てる壁も自動的に消滅してしまふのだ。(21)

これは、光と闇の対比をいうものだが、第一節で述べた「光||言語(音)」という観点から、光をことば、闇を沈黙にそれぞれ置き換えることが可能ではないかと考える。

つまり人間がことばを発するとき、それが、何らかの伝達を目的とするならば、その伝達が向けられたものに届いたか否かを知る必要があると考えられる。相手から返されることばがあれば伝達がなされたという確たる証拠と成り得るし、沈黙であればことばが拒否されたことになるだろう。ところがつねに沈黙のなかに置かれた人間は、自分なことばを発しても閉ざしても、どちらも同じ沈黙でしか

ない。自分が何かを表現したいのかしたくないのか、あるいは表出しているのか否かが判断できなくなるのだ。

「私」は、ことばについて、こうも語っている。

私はだいたいが正直な人間である。(中略) 曖昧な言い方はしない。トラブルの大部分は曖昧なもの言いに起因していると私は思う。(5)

「私」は、ことばを受ける対象となる人々が、自分の本心を読み取ってくれるだろうとは少しも考えていないのだろう。さらに「私」は「期待をするから失望が生じるのだ」(7)と語る。このことから、「私」が信じることを断念してしまった人間であることが分かる。このことは地底で博士の孫娘が、信じてさえいれればいい、と「私」に忠告したにもかかわらず、地底の魔物にとりこまれてしまうことから分かるだろう。

ところで「僕」が心を見つけたすきっかけとなったのは『ダニー・ボーイ』という唄であったが、その『ダニー・ボーイ』が、主人公にとってどのようなものなのか考えてみたい。

私はビング・クロスビーの唄にあわせて『ダニー・ボーイ』を唄った。

「その唄がすきななの？」

「好きだよ」と私は言った。「小学校のときハーモニカ・コンクールでこの曲を吹いて優勝して鉛筆を一ダースもらったんだ。昔はすぐくハーモニカが上手くてね」(35)

「私」は『ダニー・ボーイ』を通じて、他者、あるいは社会によって自己の存在が承認された経験を持つ。つまり「私」は『ダニー・ボーイ』という回路を間に介在させることによって、自己の存在を確認し保証する他者の眼差しを獲得したことがあるのだ。そして他人に認められた経験を思い出すことで、「私」は他者との間に信じるという心の動きがはたらいていたことを思い出す。「昔は」のあとに「人を信じることが上手くてね」ということばを読み取ることも不可能ではないだろう。何も信じようとしないう「私」が唯一信じているのが、この『ダニー・ボーイ』なのだ。

次に、「世界の終り」における「僕」と「彼女」の会話をみてみたい。

「心がそこにあれば、どこに行っても失うものは何もなくて母が言っていたのをおぼえているわ。それは本当？」

「わからない」と僕は言った。「それが本当かどうかは僕にはわからない。でも君のお母さんはそう信じていたんだらう？問題は君がそれを信じるかどうかだ」「私は信じる事ができると思うわ」彼女は僕の目をじっとのぞきこんでそう言った。(中略)

「たとえ何であるにせよ何かを信じるというのははっきりとした心の作用だ。いいかい？君が何かを信じるとする。それはあるいは裏切られるかもしれない。裏切られればそのあとには失望がやってくる。それは心

の動きそのものなんだ。君には心というものがあるの？」(34)

この中で、「彼女」が〈信じる〉ということばを用いるとき、「僕」の目をじっとのぞきこんだことに注目したい。目は、第一節で述べたように「生命・世界・真実の愛の始まり」を表すと考えられ、「彼女」が「僕の目をじっとのぞきこむ」ことは、「僕」のエネルギを受け信じることの始まりを示すのではないかと考えられる。

「私」が意識をなくす少し前に、次のような文章がある。鳩と噴水と芝生と母子連れが見えるだけだった。そんな風景をじっと眺めているうちに、この何日かではじめて私はこの世界から消えたくないと思った。(39)

「私」は、「鳩と噴水と芝生と母子連れ」によって「この世界」(現実世界)をはじめていとおしいものを感じるのである。これは自由なもの、あるいは魂の比喩としての鳥湧きあがる水とそこに映る光、そして芝生の生命力を感じとり、さらに母子連れによってこの世界における絶大な信頼関係を感じ取ったのではないだろうか。ことばの氾濫する世界で、ことばを信じる事ができなくなっていた「私」はここにきて、つまり最期のときになって、ようやく信じることを信じられるようになったと考えられる。さらに「信じる」ということははっきりとした心の作用であることから、ことばと心の関係をみていきたい。まず「世界の終り」では、

僕は肩口にずっと彼女のぬくもりを感じていた。不

思議なものだ、と僕は思った。人々は心というものをぬくもりにたとえる。しかし心と体のぬくもりのあいだには何の関係もないのだ。(18)

とある。これは「僕」が「彼女」を愛し始めたとき、「彼女」には応える心がないことを知ったときのものである。

これとは逆に「ハードボイルド・ワンダーランド」において、ぬくもり(あるいは、抱きしめるという行為)は、次のように描写される。

我々は抱きあうことによって互いの恐怖をわかちあっているのだ。そして今はそれがいちばん重要なことなのだ。(21)

現実世界においてことばを信じられなかった「私」は、体のぬくもりによってしか相手の存在を、また、自分の存在さえも確認できなかった。しかし「僕」は「心と体のぬくもりのあいだには何の関係もない」ことを確認し、それでも「彼女」を求める気持ちから、「彼女」の心を見つけたと思う。そして、心を通わせるためには、自己を表出することが必要であることを知る。つまり、「信じる」ことができる」という「彼女」のことばによって、ことばが「僕」にとつて、信じられるもの、信じたいと欲するものになつたのである。「私」は外部から、「僕」は内面から信じるというところを取り戻し、ことばを獲得していくのである。主人公は、ことばが自己を表出するための手段として有効であることを確信し、また、ことばが有効に使える可能性をもつと考える。また、「彼女」が心を持つたこと

で、もはや、「僕」にとつて「彼女」は幻ではなくなつたはずである。つまり「僕」にとつて「彼女」は、「僕」の作り出した可能的存在から「僕」とともに生きていく顕在的存在へと変わったのだ。もちろん「僕」自身も心を回復したということ、世界そのものも「僕」にとつて同じような変化を成し遂げたと考えられる。

結 論

ふたつの世界をつなぐ〈水〉の循環が、主人公の心的エネルギーの流れの象徴であること。また、井戸の水が「私」の失われたことばや心の象徴であること。その〈水〉が森を中心として新たな循環を形成していくことを論じてきた。

「私」が現実世界において否定してきたはずの「生」のエネルギー〈水〉・〈風〉・〈光〉|| エネルギー・生命)によって、「僕」は生かされることになるのだ。

主人公は自ら閉ざしていた心とことばを自らの手で開放し、自己存在を肯定する形で非現実世界に永住することを決意する。それは自己療養への試みの成功を意味するのだ。主人公は無意識世界に踏みとどまることを決意することによって、失われたことばと心、そして生命のエネルギーを獲得するのだ。主人公が「世界の終り」を選び、非現実世界をいきていくということは、すなわち自己を表出しつづけられるという点において、現実を生きていくこととなるのである。

結果的にこの作品は、自己表出の可能性を発見する過程を描いたものであり、主人公にとって自己の内面に向かうことは、同時に外に向かうことであつたのだ。

注1 J・ヤコービ『ユング心理学』（日本教文社）

※印はすべて、アト・ド・フリース『イメージシンボル事典』（大修館書店）による。

（補注）

ふたつの世界における〈水〉の循環、及び森を中心とする新たな循環を便宜的に図式化すると左図のようになる。実線部は作中に表現されている〈水〉であり、点線部は稿者の論に基づく想定である。尚、森と井戸が同じ水脈を有するという判断も稿者によるものである。

新たな円環は、「僕」が森に入った時、完全な形をとるものと考えられる。

（補注）

